

# ◆連載

# いま留萌をかし

## ●留萌の水道

留萌に上水道が敷設されたのは昭和三年のことである。全道的にみても早いほうで、函館の明治二十二年は別格としても札幌市や釧路市よりも早い。これも明治四十三年に始まった留萌港の築港事業によってもたらされたといってもよい。

元来、留萌は水の良い所ではなかった。明治三十年に殖民状況調査のため来留した河野常吉はその野帳に次のように記している。

― 飲料水 市街地ハ井ヲ用フ 低所ハ谷地気ニシテ水质悪ク殆ド飲ム可カラズ  
 一 明治十二年頃迄栖原ニテハ越年三四十人ノ内平均十名位ハ死セリ 是ハ水悪キノミニアラズ 養生モ良カラヌ故ナリ 三四十人越年セルモ平常六七人ノ病人ナキ事ナシ

このように、留萌の水は特に川北と呼ばれた現在の元町

地区が悪かった。そのため、栖原では明治十三四年頃に現在の職員会館前の湧き水を懸樋で引つ張り留萌川の上を渡し、運上屋のあったコタン浜のところまで引いて来た。

しかし、築港工事が進むにつれ築港完成後に入港船への船舶用給水の必要性が真剣に取りだたされるようになった。そして、何回となく新しく井戸が掘られ試験されたが、飲料水に適したものを発見できなかった。このため、上水道敷設の必要性に迫られた。

大正十二年九月、工事認可、十三年五月鉄管購入契約、十四年工事着工した。水源は増毛町大字舎熊新信砂川筋ピソナイ川の合流点より上流にあり、この伏流水をろ過池に誘導し、ここから沖見町の配水池までひき、ここから市街へ給水した。これは現在もこの順路で留萌市内各家庭まで給水が行われているのである。

信砂の浄水場から沖見町の配水池までの送水管は延長千二百メートル余で工事には特に慎重を期した。そのなかでも信砂川を横断する渡河点と鉄道線路横断の二ヶ所は細心の工事が施行されたという。

大正十四年十月十五日通水が行われた。これに引き続き、市内の給水管の敷設工事等がおこなわれ、一応上水道の完成をみるのは昭和三年のことである。当時の計画給水人口は四万七千人、一日最大給水量は一万四千八百立方メートルであったが、給水人口は千人、給水量は僅かに二千八百立方メートルにすぎなかった。

水源は標高八十二メートルにあり、その源は遥か暑寒別岳の雪解け水に発し、水質良く、水量も豊富である。この水が半世紀にわたり留萌市民の咽喉を潤し続けている。それも留萌港の築港という留萌百年の大計の副産物として

生まれたことを覚えておいて欲しいものである。  
 また、水源が隣の増毛町の所属であることから、留萌市と増毛町は紳士協定を締結しており、お互いの理解の上にもまだまだ活躍してもらおう。

現在、留萌ダムの計画が徐々に進行しつつある。しかし、まだまだ、この昭和三年に完成した留萌の上水道の使命は終わった訳ではない。これから



配水池の建設 (現沖見町)

特集 頑張る人の青春を後押し。

昭和63年2月/発行・留萌市編集・総務部秘書企画課印刷・株式会社留萌新聞社

1988

2